陳染の「小鎮シリーズ」について

鷲巣益美

陳染（本名）は一九六二年四月十日、北京に生まれた。彼女の創作の出発点は詩だった。詩の発表を始めてから三年後、大学在学中の一九八五年に短篇小説「嘿、別那麼喪気」が《青年文学》（第十一期）に掲載された。以後、雑誌や新聞に発表された作品は詩・小説・散文など計八十編余り、単行本は十二種十五冊が出版されているらしい。翻訳は日本のほかに、イギリス、ドイツで出ているという［注1］。

彼女の身辺についてざっと記しておくと……

家族構成：古典文学者の父、児童文学者の母（陳燕慈）、兄。一九五七年～の“反右派闘争”の影響を受ける。幼い頃より両親は不仲。一九七九年にようやく両親の離婚が成立し、陳染は母とともに暮らすようになる。父はその後再婚。

学歴：小・中・高は北京市内。一九八二年北京師範大学分校中文系本科に入学。本格的に文学作品（古典を含む）に取り組んだのは、大学入学後のことらしい。

職歴：北京師範大学中文系教師、北京職業技術師範学院中文系教師、作家出版社編集者、新聞記者。

特技：母の勧めで十歳からアコーディオンと作曲を習い、学業よりも音楽に熱中、一時はプロを志す。文化大革命の終結後に世間での音楽に対する熱が冷めたこと、大学受験を控えていたことから音楽家への道を断念。

詩作：大学在学中、《詩刊》《人民文学》《北京文学》などに詩が掲載され、『青年詩選』で第一席を占めたことがある。“桂冠詩人”などの賞も受けた。詩を発表するのに「染児」のペンネームを使っていることがある。ガリ版刷りの詩集二冊が学内で回し読みされる。正式に出版された詩集は、今のところない。

北京を離れたこと：①一九八六年、湘西へ行く［注2］。②一九八七年夏～八八年中頃、大学教員の一団に加わって北京郊外の農村で教える。③一九八九年末～一九九一年、香港・オーストラリアに住む。オーストラリアでは「心理描写と精神分析にすぐれた作家」という肩書きで、国際精神科学協会に加入した。④一九九四年、欧州へ。ロンドン大学・オックスフォード大学、エセック

ス大学、エジンバラ大学などで講演。この頃、海外に住むチャンスもあったらしいが帰国する。

肩書き：一九八五年、北京作家協会会員。一九九〇年、中国作家協会会員。一九九四年十月、広東青年文学院と契約し専業作家となる［注3］。

近況：初の長篇「私人生活」を《花城》一九九六年第二期に発表、間もなく単行本となる。この作品についての評論やインタビューは、以前の作品に比べて多いようで、関心を集めていることがうかがえる。一九九七年三月、彼女の友人に聞いたところによると広東青年文学院との契約はすでに切れ、経済的な理由から再び作家出版社で編集者として働いていると言う。

＊　＊　＊　＊　＊

一九八五年に小説家として出発して以来現在までに、陳染の作品の題材やスタイルには幾度か変化が見られる。そのなかで最初に読んだのが、一九八七年から八八年にかけて発表された、どことなく不思議で奇怪な雰囲気をもつ、いくつかの短篇小説だった。南の小さな「鎮」（村もしくは町）が舞台とされているこの時期の作品は、発表順に挙げると

(1)「小鎮的一段伝説」（《当代》87-1）

(2)「乱流鎮的那一年、特別是荒涼的秋天與冬天」（《東北文学》88-2）

(3)「塔巴老人」（《作家》88-6）

(4)「不眠的玉米鳥」（《作家》88-11）

(5)「麻盖児」（初出不明、『紙片児』所収）

の五編である。

これらの作品は、中国では「現代主義的神話」、「超現実荒誕神話」、「現代志異」的「小鎮文学」、「現代主義的童話」などと受けとめられ、「奇抜な想像、神秘的なムード、超現実的な描写、不条理なストーリー、奇怪な人物」が読者の注目を集めたという。

中国の評論家たちは「神話」という言葉を「神秘的な、不思議な」という意味で使っているようなのだが、童話もしくは伝説的小説と見るのがもっとも妥当ではないだろうか。現代のおとぎ話と言ってもいいかもしれない。一般的に言って神話とは、「神」を中心とした民族や国の成り立ちにまつわる物語であり、創造の物語であり、たとえ破壊があったとしてもその結果何かを生み出していくものだ。だがこれらの小説を読んだあと、「破滅」「滅亡」「停滞」「退化」という言葉しかわたしには思い浮かばなかったし、何よりも「神」に相当するものが登場していないと思うのだ。奇跡的な功績に対して「現代の神話」という言葉が使われるときとも、ニュアンスは異なる。

ともあれ、毛色の変わった小説であることに変わりはない。タイトルでも使

ったが、上記の五編をここでは「小鎮シリーズ」と呼ぶことにする。

＊　＊　＊　＊　＊

「小鎮シリーズ」は、一九八六年に陳染が湘西へ出かけた後に書かれたのだが、生まれ育った北京とは異なる風物や風俗に触れたことが、作品を書くきっかけになったようだ。このシリーズに共通するのは、「鎮」という閉ざされた空間に生き、結局は封じ込められ抑圧された人生を送ることになる人々が描かれているということだ。主人公が狭苦しくて保守的な社会を打破するのではないか、という期待を抱かせる場面はあるのだが、人々の意識や社会構造を変えるには至らず、主人公は消息を断ったり沈黙してしまったりする。

これらの作品が書かれた頃の中国の社会情勢を重ねてみるのは、可能性はゼロではないにしてもいかにも安直だ。閉鎖的な南方の農村を初めて訪れた都会育ちの人間が、そこに「得体の知れない、目には見えない何か」を感じとったのだろう。彼女の散文を読むと、社会的なことよりも自らを含む人間の内面や超自然的なことに、専ら関心をもっていることがうかがえる。また、時として不気味とも思える人物やエピソードに目が注がれがちなのだが、森や天候などの自然現象の描きかたについても、湘西行きは大いに得るところがあったのではないかと思う。

さて、どのあたりが「奇抜」「神秘的」「奇怪」とされたのか。とりあえず登場する事象を、ほんの一部だがアトランダムに並べてみよう。

> そこに足を踏みいれた者が生きて帰ってくることのない禁断の土地・幼い頃は眼が大きかったが体が成長しても眼の大きさはそのままで、口が大きいため醜い顔になった女、幼い頃は頭が異様に大きかったが体が成長しても頭の大きさだけはそのままだったので異様な体形となった男（「小鎮的一段伝説」）、いっぽん足の男・実の祖父と母の間に生まれたらしく十五になっても口をきかぬ娘・人間の食糧を荒らさない鼠・鼠を喰わぬ猫（「乱流鎮的那一年、特別是荒涼的秋天與冬天」、のち「紙片児」と改題）、人の死を予感することができ、あの世での慣習を知る少女・その少女にだけ心を開き、若い頃に身請けするはずだった遊女のために紙銭を焼き、やがて少女に看取られる老人（「塔巴老人」）、害鳥が荒らしたあとのとうもろこしを食べて生理器官に異常をきたす人々、自動車の排気口を見て「オスだ！」と叫ぶ農民（「不眠的玉米鳥」）、等々……

これらひとつひとつについて、心理学・精神分析学・哲学的な解読をすることも可能なのだろうが、残念ながら現在の筆者の能力はそこまで及ばない。ただひとつ言えるのは、形式上は「小鎮シリーズ」としてひとつの世界をつくりあげ完結したが、その中で描かれた上記の事象は、その後の作品に形を少しず

つ変えて頻繁に現れているということだ。 たとえば老人の死は「時光與老籠」に、あの世の慣習を知る少女は「空的窓」に。また、作品全体に漂う怪しい雰囲気は「都市之魔」（《天涯》88-12）あたりに引き継がれたのではないかと考えている。

「都市之魔」には幽霊とおぼしき物体や、夢と現実の区別がつかないような人物が登場する。ホラー小説らしきものにも手を出していたのかと、一時は内心喜んだのだが、その期待は今のところ裏切られている。その後に書かれた作品で、あの世とこの世の狭間に身を置くような人物は度々登場するのだが、彼女の興味は心霊現象ではなく心理学や精神分析学に向いているのではないかと思われるのだ。それはそれで面白いのだけれど、一度でいいからあの世に首までどっぷり浸かったような作品を書いてはくれまいかと、淡い期待を抱いている。「没结局」（《作家》89-4）で「文学以外に、わたしは中国の古典哲学・宗教・漢方医学に興味をもっている。また、西洋の精神分析学と現代主義哲学、超自然界と巫術・宗教的な神話および学際科学にも興味をもっている（除了文学，我感兴趣于中国古典哲学、宗教与中医学，也感兴趣与西方精神分析学与现代主义哲学，感兴趣与超自然界和巫术、宗教的神话以及边缘科学）」と書いていることを実証するように。

＊　＊　＊　＊　＊

［注1］ 邦訳は「虚ろな人、誕生」（原題［空心人誕生］、飯塚容訳、『季刊中国現代小説』第Ⅰ巻第31号所収）と「誰もいない窓」（原題［空的窓］、鷲巣訳、『季刊中国現代小説』第Ⅱ巻第2号所収）。

［注2］ 湘西：湖南省西部地区の通称。雪峰山以西の、沅江上・中流域と澧江上流域を指す。大部分が海抜千メートル以上にあり、土家族・苗族・侗族・瑶族などが居住する。「塔巴老人」の末尾に「一九八七年六月、湘西苗寨にて」とあることから、苗族の住むところへ行ったのだろうか。「苗寨」という地名が実在するかは、今のところ不明。

［注3］ 広東青年文学院：楊干華「広東青年文学院、好嘢」（《作品》95-1）によると、作家の陳国凱らによって、才能ある若手作家に経済的・時間的保証を与えるため設立された団体。設立時の招聘作家は張旻・余華・韓東・陳染・商河・楊雪萍・東西・梁鳳蓮の八名。終身雇用制はとらず、書いた作品に応じて報酬を払うようになっていたらしい。ちなみに《作品》は95-1で彼らの作品の特集を組み、95-5でそれらの作品についての座談会を開いている。《文学報》97-1-23によると資金難から一時停止していたが、《佛山文芸》の援助により、一九九七年五月に第二期の作家を招聘の予定だという。

資料（著作一覧と関連文献）（1997年4月16日作成）

【陳染著作一覧（未定稿）】

☆誌名・紙名・書名の後の ＊ は、二次的資料によることを示す。

☆［1］～［4］は雑誌掲載順。掲載号の後に記された数字（①～⑨）はその作品が収録されている［5］の単行本を示す。掲載誌が不明のものは、単行本の番号のみを記す。

☆《誌名・紙名》『書名』「文献のタイトル」とした。

［1］詩

太阳落山了	《诗刊》84-5（“染儿”の筆名で）
海边的孩子	《北京文学》84-7（“染儿”の筆名で）
书阁	《北京文学》84-7（　〃　）
夕阳	《北京文学》84-7（　〃　）
归来的船长	《北京文学》85-4、④
乡情重重	《北京文学》85-4
告别森林	《人民文学》85-5、④
如果	《人民文学之友》85-6*
旅人！旅人	《北京文学》86-6、④
童年	④
那时候	④
回归大海	④
妈妈，请你记住	④
迟到的秋天	④
启航	④
寻	④
淡淡的星光	④

［2］小説

嘿，别那么丧气	《青年文学》85-11、①
大山的雾	《文艺》86-5*、①
世纪病	《收获》86-4、①③④
人与星空	《北京文学》86-11、①
消失在野谷	《城市文学》86-11*、①
定向力障碍	《人民文学》86-12、①③
小镇的一段传说	《当代》87-3、③⑤⑦

归，来路　　《胶东文学》88-1*、⑤
乱流镇的那一年，特别是荒凉的秋天与冬天
　　《东北文学》88-2*、《小说选刊》88-6
　　（①③④⑦には「纸片儿」と改題して収録）
塔巴老人　　《作家》88-6、①⑤
不眠的玉米鸟　　《作家》88-11、③
都市之魔（精灵／黑宝石戒指）　　《天涯》88-12*、③
孤独旅程　　《春风》89-5*、①③
角色累赘　　《中外文学》90-1*、②③
空的窗　　《收获》91-1、《小说月报》91-5、②③④⑥
空心人诞生　　《百花洲》91-2*、《小说月报》91-9、②③④
与往事干杯　　《钟山》91-5、②③④
无处告别　　《小说家》92-1、②③④⑥
嘴唇里的阳光　　《收获》92-5、②④⑦
站在无人的风口　　《花城》92-5、②④⑤⑥⑦
时光与牢笼　　《作家》92-10、《小说月报》93-3、
　　②④⑤⑥⑦
潜性逸事　　《收获》93-3、④⑤⑥
巫女与她的梦中门　　《花城》93-5、⑤⑥
麦穗女与守寡人　　《作家》93-7、⑤⑥
秃头女走不出的九月　　《作家》93-7、⑤⑥
饥饿的口袋　　《大家》94-1*、⑤⑥⑦
与遐想心爱者在禁中守望　　《花城》94-3、⑤⑥⑦
沙漏街的卜语　　《大家》95-1*、⑦
只有一只耳朵的敲击声　　《钟山》95-1
　　（⑥⑦には「另一只耳朵的敲击声」と改題して収録）
凡墙都是门　　《花城》95-1、⑥⑦
忽略的一种　　《江南》95-5*
破开　　《花城》95-5、⑦
私人生活　　《花城》96-2、⑨
时间不逝，圆圈不圆　　《花城》97-1
麻盖儿　　①
☆「与往事干杯」は映画化されたと聞いたことがある。

［3］散文（創作談、書簡、自伝を含む）

遥远的梦	《中国青年报》85-5-31*
一个人在路上	《太原日报》88-10-6*、④⑧
我是主人	《北方文学》88-11、④⑧
走远是神话，回头是现实	《当代作家评论》88-6
没结局	《作家》89-4、④⑧
两封信	《北方文学》91-3
每个人都有一面窗子	《小说林》92-1*、④⑧
重返旧时光	《芒种》92-10*、③④⑧
“潜在自杀者”的迷失地	《文学自由谈》93-1*、④⑧
自语	《文艺争鸣》93-3、④⑧
挺住意味者一切	《北京文学》94-3、⑧
逝去的声音	《十月》94-3、⑧
超性别意识与我的创作	《钟山》94-6、⑧
阿尔小屋笔记	《作品》95-1
	（⑧には「阿尔小屋」と改題して収録）
陈染散文小辑：一个不老的人从一个老人那里看到	《作家》95-1、⑧
谎言是树一样高大的朱儒	〃　、⑧
我的道路是一条绳索	〃　、⑥⑧
自由是一座需要围墙的绿屋顶	〃　、⑧
陈染散文四篇：性别的距离	《芙蓉》96-5
隐居清结与临在性	〃
个性与梦想	〃
两种生活之间	〃
散文四篇：艺术家的自由	《作家》96-8
写作是最好的交谈	〃
作家的“个人化”	〃
利己与利他	〃
一封信	④⑧
距离带来亲密	⑧
自己走路	⑧
日计残片	⑧
女性用品	⑧
炮仗炸碎冬梦	⑧
反“胡同情结”	⑧

死的启示　⑧
这个人原来就是那个人　⑧
“远”对“近”说　⑧
稠密的人群是一种软性杀手　⑧
断片残简　⑧
写作与逃避　⑧

［4］インタビュー
另一扇开启的门　《花城》96-2、⑨
女性个体经验的书写与超越　〃

［5］単行本
①『纸片儿』　作家出版社（文学新星丛书）1989年2月
②『嘴唇里的阳光』　长江文艺出版社（跨世纪文丛）1992年12月
③『无处告别』　时代文艺出版社 1993年6月
④『独语人』　北京燕山出版社 1993年10月
⑤『在禁中守望』新世界出版社（新世界经典文库：先锋小说系列）1994年10月
⑥『潜性逸事』　河北教育出版社（红罂粟丛书）1995年4月
⑦『站在无人的风口』　云南人民出版社（她们文学丛书：小说卷）1995年8月
⑧『断片残简』　云南人民出版社（她们文学丛书：散文卷）1995年8月
⑨『私人生活』　作家出版社 1996年3月
⑩『与往事干杯』湖北辞书出版社*
⑪『陈染文集』1～4　江苏文艺出版社*
⑫『陈染作品自选文集』　光明日报出版社 1997年2月*
☆このほかに『荒诞派小说』（时代文艺出版社：新时期流派小说精选丛书，1988年11月）と『世纪病：别无选择』（北京师范大学出版社：80年代文学新潮丛书，1989年5月）に「世纪病」が、『一九九二短篇小说选』（人民文学出版社，1993年9月）に「时光与牢笼」が、『逼近世纪末小说选（卷一）1990-1993』（上海文艺出版社，1995年9月）に「无处告别」が収録されている。

【関連文献】
曾镇南「论一种现代的创作情绪 -从陈染的小说谈开去-」《作家》88-6
李　劼「致现代主义童话作家陈染」　《当代作家评论》88-4
陈骏涛「寂寥和不安分的文学探索 ——陈染小说三题」《文学评论》92-6
赵毅衡「读陈染，兼论先锋小说第二波」　《文艺争鸣》93-3

张颐武「话语的辨证中的“后浪慢” ——陈染的小说」《文艺争鸣》93-3
王　干「寻找叙事的缝隙 ——陈染小说片论」　《文艺争鸣》93-3
虹　影「记黛二」　《文艺争鸣》93-3
方　铃「陈染小说：女性文体实验」　《当代作家评论》95-1
陈巧云「陈染小说的一种解读」　《福建论坛・文史哲版》96-1
陈晓明「无限的女性心理学：陈染论略」　《小说评论》96-3
吴义勤「生存之痛的体验与书局 ——陈染小说论」　《小说评论》96-3
戴锦华「陈染：个人和女性的书写」　《当代小说评论》96-3
孟繁华「忧郁的荒原：女性漂泊的心路秘史 ——陈染小说的一种解读」
《当代小说评论》96-3
贺桂梅「个体的生存经验与写作 —陈染创作特点评析」《当代小说评论》96-3
王　蒙「陌生的陈染」　《读书》96-5
丁　帆「逃逸“战争”的谵语——读陈染的《私人生活》」《雨花》96-10
王小波「《私人生活》与女性文学」　《北京文学》96-11
陶东风「私人化写作：意义与误区」　《花城》97-1
曾镇南『纸片儿』（［5］の①）序文
曾镇南「陈染评传」『中国当代青年女作家评传』 中国妇女出版社 1990年6月
薛　化「寓真实与荒诞，寄深情与流乱」　〃
周　柯「寂寥而不安分的文学探索」　『嘴唇里的阳光』（［5］の②）

国内主要文学期刊发行稳中有升

韩小蕙

最新消息：今年文学期刊的发行稳中稍有上升。

《十月》刚刚到的数字是 10 万余，跟去年持平。主编王占军显得很兴奋："这下我们就宽心了。"他介绍说，《十月》现在已进入全面提高刊物质量的努力之中，由于一些老编辑的离开，该刊已由过去的"名编战略"转移到"小集团作战"。

《当代》的发行数还没到，副主编汪兆骞说："估计持平，根据是去年最后一期的印数接近 12 万。去年每期都在 11 万、12 万册上下浮动。"

《中华文学选刊》与去年持平。副主编刘茵介绍说，在最近新闻出版署所属 50 多家刊物的抽查中，该刊获得 90 多分的较高分数。"今年我们的栏目更丰富，封面也作了改动。"

《小说选刊》发行数上升了 2 万册，这本复刊仅一年多的刊物发行数已达 8 万册。该刊今年将有两项新举措，一是印行 4 枚有收藏价值的文学书签，赠给订户；二是在全国定期召开"小说茶会"，邀请读者、作者、记者、评论家共同评刊。

笔者还了解到，外地一些文化类综合刊物，如山西的《火花》、广东的《华夏》等，正虎视眈眈地盯着北京书市。

《光明日报》 1997-1-22